

# フレーベルの遺跡を訪ねて



内  
山  
憲  
尚

## 一、チューリンゲン地方

一七八二年四月二十一日フレーベルが生まれたオーベルワイスバッハ、はじめて幼稚園を開いたバッド・ブランケンブルグ、彼が教育のために活躍をした行動圏はチューリンゲンを中心としている。

チューリンゲン地方は戦前はドイツの中心部で、ドイツの緑の森の心臓と言われたところであるが、第二次世界大戦でドイツが東西に二分せられ、チューリンゲンは東ドイツ（ドイツ民主主義共和国）方に入れられたので入国手続が面倒なのと、フレーベルの遺跡の所在地がかなり辺鄙なところで、交通の便がよくないなどの理由で、従来幼児教育研究者でも、わざわざ訪ねる人が少な

かったらしい。

われわれの今回の欧州ソ連幼児教育研修視察団のスケジュールには、最初からフレーベルの遺跡を訪ねることを主目的として予定をたてた。

西ベルリンと東ベルリンの境界線は、東側と西側とに五十メートル位へだてて空地があ



東独・西独国境

り、四、五十センチの壁が両方に造られている。ベルリンが中央から西と東に分けられて検問所は両方に、ソ連側と連合国側に在って、自由に往き来ができない。

われわれ旅行者もバスボートを示さなければならぬ。ことに西から東ドイツへ入るのは非常にやかましく、西ドイツのバスから全部が下りて、東ドイツのバスに乗り替えた。西ドイツの運転手もバスガイドも全部下ろされて、東ドイツ側へは下りられず、そのまま西ドイツへ帰らされて、代って東ドイツの運転手がのって来た。われわれはその車の下で約一時間ほど待たされ、各自の持ち金を書き出させられた。バスボートは一括提出、あらかじめ送ってあったリストと引き合わせである。なるほどドイツ民主主義共和国はうるさい国だと思った。

われわれのソ連、ドイツ民主主義共和国への交渉は万事毎日新聞サービスの海外課へ一任したから直接交渉をしにくれたが、参観先やホテルなども現地へ行ってみなければハッキリしたことがわからないので不便でこまると言っていた。

東側の検問所まで時間をとって、ベルリンのシュネルフェルト空港を、七時二十五分に出てローカル線に乗りかえて、終点エルフルト市の空港に着いたら陽がトツブリと暮れていた。東ドイツ南部の町エルフルト市は人口二十万のチョツとした町だ。その夜

はこの町のツーリストホテルへ泊るのだが、田舎町で四十名の客の食事は用意がでかかると、町の中央にあるインターナショナル・レストランで夕飯をとることになった。いよいよ明日はフレールの遺跡を訪ねると思うとうれしくて心がおどる。

## 二、バッド・ブランケンブルグ

「明日は強行軍だから」と早寝をする。五時起床。天気はよくない、小雨が降っている。六時半朝食、七時十分ツーリストホテル出発だ。本日フレールの遺跡を案内してくれるガイドさんが来た。四十歳前後のでっぱり肥えたミセス・グラナーレルさん聞いて見るとフレールの遺跡の案内はじめてだそうで、大きなチューリンゲン地方の地図を前に置いて運転手君といちいち相談だ。

エルフルト市の地方庁へガイドさんとこちらの世話係とが、リストを持って届けに寄り、いよいよバッド・ブランケンブルグへ向かう。道は舗装はしてないが、幅の広い坦々たる道だ。なだらかな丘陵がつづいてところどころに大きな森がある——チューリンゲン特有の森だ。ライ麦の畑は青々と畳を敷きつめたように広がり、菜の花の黄が色模様を織りなしている。白と黒のまだら牛がのんびりと草をたべているのも静かな風景である。



フレーベル博物館前

彼の友人ウ  
の原稿と、

の子守歌」

版した「母

四四年に出

原稿、一八

の教育」の

の幼稚園の写真、恩物工場の古画、一八二六年に上梓された「人

二階左側が文献や写真の展示室で、作業教育所として発足当時

あまりのうれしさにいきなり二階にかけのぼった。

ル第二幼稚園になっている。

博物館は木造三階建てで、二階、三階が博物館、一階がフレーベ

てた——その時のよろこびは全くとえようがない位であった。

歩く、二百メートル位歩いてやっとフレーベル博物館をさがし当

バスを町の中央に停めてガイドさんが町の人たちにたずねながら

ル博物館は地図にもないし標識もないので、どこだかわからない。

口一万ほどの小さな町であるが、フレーベルの幼稚園やフレーベ

業教育所（一八四〇年幼稚園と改称）を開いたところである。人

ンゲンブルグの町に着いた。ここはフレーベルが一八三七年に作

ブナの並木道を走ること三時間あまり。目的地のバッド・ブラ

### 三、フレーベル幼稚園

ことを心からよろこんでおります」とうれしそうに話された。

本は古くからフレーベル先生に理解があり、おたずねくださった

んなにたくさんわざわざ日本から来てくださってありがとう、日

本へ帰ったら莊司先生に渡してくれと手紙をこづかった。「こ

れて、著書などいただいたと「フレーベルの研究」を示された。日

三年前に広島大学の莊司雅子教授が、フレーベル学会の時に来ら

った。二階の右側の部屋の館長室に案内されて、しばらく話した。

館長エラー・ウィッケナー女史が親しく親切に案内してくださ

ど、三階には彼が生前に使用していた身のまわり品家具什器、フ

レーベルの書簡などが陳列してあった。

図、フレーベル自筆の楽譜、彼の友人や夫人、後援者の写真な

ンゲン画伯の書いたと言われているさし絵の原画、恩物作製の原

ころに建てられた。

階建の二、三階が博物館となり、一階が幼稚園となって現在のと

て替えられ、それがさらにフレーベル博物館の新築とともに、三

フレーベルが、最初に開いた一八三七年の幼稚園は、その後建

二度目に建てられた幼稚園の建物はそのままあるが、今では普

通の人の住居となっている三階建木造で、二階の壁には、フレー

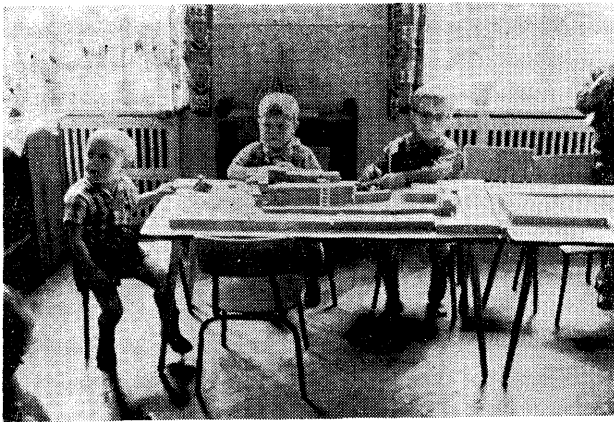
元の幼稚園 標札「一八四〇年ここに幼稚園を始む」



ベルの幼稚園と書かれており、下の壁の標札には「一八四〇年フ  
レーベルが、はじめて幼稚園を開いたところ」と書かれている。

現在の幼稚園は十二坪ばかりの保育室が四つ。一クラス十六名  
平均で四人の先生が静かに保育をしている。幼稚園についての印  
刷物もなく、カリキュラムらしいものもない。部屋の中にはフレ  
ーベルの恩物やおもちゃの類が置いてあって、子どもたちは自由  
にとり出して遊んでいる。わが国のように一クラス四十名からい  
て一斉に製作をしたり、歌を歌ったりするようなことはしない。

ピアノが一台、遊戯室は別がない。屋外運動場も幼稚園の周囲  
に垣根もなんにもない庭で、わくのぼりのような遊具と鉄棒のよ  
うな遊具と砂場の小さいのがあるだけである。  
あるクラスは十一名で、フレイベルの第六恩物を机の上へなら  
べてみんなで遊んでいた。この組は年少組である。一クラスは製  
作をやっていた。



積木で遊ぶ園児

先生は個人教  
授のような形で  
だまって坐って  
いた。部屋は明  
るく、子どもが  
少ないので、部  
屋や机は十分に  
使用でき、大き  
く高い窓の前に  
はいろいろな植  
木鉢や、花の差  
した花ビンが置  
いてあった。わ  
が国の幼稚園の

ことを思うと全くイメージがちがつて、ほとんど家庭といった感  
じである。われわれが行ったことが連絡されたい。町長さ  
ん、教育委員会の人たちがあいさつに来られた。

十一時までに、フレールベルの生誕地オーベルワイスバッハに行  
かねばならないので、ウィッケナー館長と別れて、博物館を出た  
ら、表にフレールベル小学校の五、六年生が三十名ばかり先生に引  
率されて来て待っていてくれた。町の人といっしょになって歓迎  
会だ。われわれをとり巻いて歓迎の歌の合唱だ。われわれも「お  
返しに何か歌おう」「さくらさくら」がよかろうと四十名がドラ  
声を張り上げて歌った。歌が終わると、町から団へと町の写真  
帳、フレールベルの記念バッジと、小さな三角旗をおくられた。

子どもたちは手紙を各人一人一人に手渡した。画用紙のような  
厚紙にそれぞれ花の絵が書いてあり、子どもの字で

「DDRの子どもより 日本の子どもへごあいさつ DDR  
の子どもたちは、きれいないくつかの花をもって 日本の子  
どもたちに、心からのごあいさつを申し上げます。世界の  
すべての子どもたちのために平和をのぞんでいます」

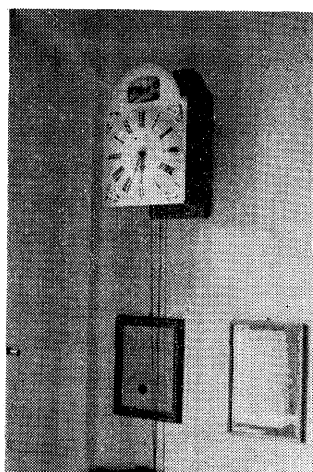
と書いてあった。「さよなら、さよなら」手をふって見送って  
くれた。教育委員会の人たちと六年生の大きい子ども四、五人はバ  
スのところまで見送って、いつまでもなごりおしそうにしてい

た。全く純情、素材で、その印象は永久に忘れることができない。

#### 四、オーベルワイスバッハ

バスに乗って、約五十分、緑の並木道を南へ進んでお昼前にフ  
レーベルの生地オーベルワイスバッハに着いた、町はブランケン  
ブルグより小さかった。出生の家はすぐわかった。記念館になっ  
ている。二階建の家だ。二階の部屋が生まれたところで階段をあ  
がるとすぐの部屋で、寝台があり寝室が保存されている。柱には  
古風な時計があり、ベッドの枕元には棚があつて、フレールベルの  
像が置いてある。フレールベル記念館といっている。別に部屋には  
写真や、恩物などがならべてあつたが、博物館のものより数も少  
なく、貴重さにおいてもいくらかおとっているように思われた。

この生誕の家でも階下が幼稚園になっていて、一クラス十五、



記念室の時計

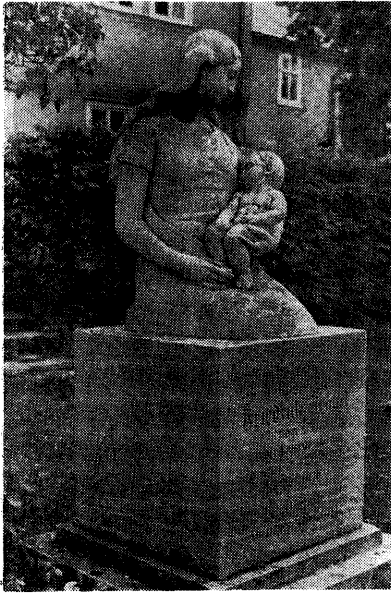
六名で三ク  
ラスあつ  
た。保育室  
は博物館の  
ものより小  
さかった。  
幼稚園の後

の方が庭園になっていて傾斜した丘になっている。フレーベルの自伝に出てくる畑のあったところらしい。

フレーベル生誕の家は表の大通りに面していて、ちょうど家の前的大通りに面したところに白い坐像が置いてある。フレーベルの母親が子どものフレーベルを抱いているところだそう。近ごろ作られたものらしい。面に「フリドリッヒ・フレーベル、一七八二年—四二二　ここに生まれ　一八五二—六—二二　ジュヴアイナに死す」と書かれてあった。

ここでも町長さんのフリッツ・シアワーベ氏が花束を持って歓迎に来られ、いっしょに写真に納まってくださった。

十二時になったので町のレストランへ入った。粗末なレストラ



生誕の家の母子像

ンだが清潔で感じがいい。食事を始めようとするところへ、町の教育長があわてて入って来られて、いねいなあいさつをされた。

「こんなにたくさんの方が、フレーベル先生の生まれられた当地をお訪ねくださってありがとうございます。私たちDDRも平和教育のためにフレーベル先生の教えを守って保育を続けております。日本では古くからフレーベルの方式による幼児教育がなされていていることを聞いております。共産の国と資本主義の国とのちがいはありますが、子どもを平和に育てることにちがいはありません。どうぞ今後とも

よろしくお願いいたします」

#### 中央が町長さん

こちらからお礼のことばを述べて、なかなか交歓会が開かれた。肥えた教育長さんは食事の終わるまで待っていてくださって、われわれがバスに乗るのをいつまでもいつまでも見送ってください



た。バスはフレールベルの生誕の地オーベルワイスパッハを離れてエルフルト市へ、約四時間の道をいそいだ。

たそがれてゆくチューリンゲンの森の中をぬけて――

## 五、フレールベルの遺跡訪問者

日本人でフレールベルの遺跡を訪問された方は、われわれ以前に相当にあったであろうが、その紀行や報告を発表された方を手許にある書物の中から拾い上げて見る。

大正十四年五月、奈良女子高等師範学校の小川正行教授が訪問されている（「フレールベルの生涯及思想」 P 365）。汽車で行くときハルツのブランケンブルと行きに間違つて乗って失敗し、やっとチューリンゲンのブランケンブルグ村へたどり着いた苦心談がのっている。二日目にやっと「フレールベルハウス」を訪ね当ているが、これはどうも現在のフレールベル博物館の前身の建物らしい。昭和四年五月広島大学の長田新教授が単身で訪ねておられる（「フレールベル自伝」 P 273）。五月十九日にブランケンブルグ町を、二十六日に生誕地のオーベルワイスパッハを訪ね、二十三日フレールベル博物館を訪ねておられる（昭和十二年発行）。昭和十年十一月、前フレールベル館高市慶雄社長が第六回世界教育会議に出席しての帰りに遺跡を訪ねている（実地踏査に基づくフ



ウィッケナー館長

ら、昭和当初にフレールベルの遺跡を訪ねられたようである。

現在のフレールベル館の菅野健介社長も先年現地を親しく訪問されたそうであるが、まだ直接にいろいろ話をする機会を得ない。

フレールベル博物館長エラー・ウィッケナー女史の話では広島大学の莊司雅子教授が三年前に訪問されたとのことである。

ウィッケナー館長は日本からの訪問——しかも四十名の幼児教育者が大挙して訪問したことに対し、非常によろこびを持たれたようである。さっそく多大の感謝と今後の交宜を乞うというていちょうな書面をいただいて恐縮している次第である。

（鶴見女子大学）

レーベル全伝」P 41）。この本の序文にお茶の水女子大学の倉橋惣三教授が「殊に自分のフレールベル遺跡巡礼記を書きまとめることを怠っている私としては、この書の成ったことによって、なんとなく、荷を一つ人に頒けたような気安さをも味っているのである」と言っている。